

# 生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室



## 今月のピックアップ

おうぎ  
黄耆

### オウギとは・・・

キバナオウギ : *Astragalus membranaceus* または、*Astragalus mongholicus* (蒙古オウギ) の根で、ごぼうのような形状をしています。地上部はというと右の写真のように、マメ科特有の濃い緑の葉を左右対称につけ、ぷっくりとした豆果を結びます。マメ科の植物なので、刻むと特有のマメ臭く、味はわずかに甘みがあります。

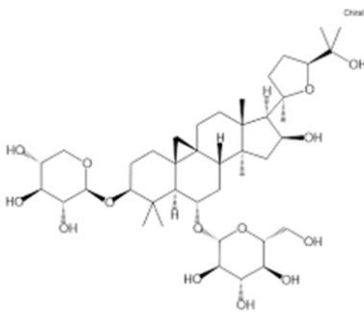


補剤の代表生薬で、人参、白朮と組み合わせてよく使用されます。

生薬ものしり辞典 47  
栄養ドリンクにも含まれる生薬『黄耆』より

【薬効】 ほきしょうよう こひょうしかん たくどくせい き りすいしょうしゅ  
補気昇陽・固表止汗・托毒生肌・利水消腫

### オウギの作用って・・・?



アストラガロシド

(和方医学研究所株式会社より)

オウギの含有成分は、フェノール配糖体、サポニン（アストラガロシド）、イソフラボン（ホルモネチン、アストラプテロカルパン）で、その薬理作用は、利尿、抗炎症、免疫機能の増強（マクロファージの産生促進、貪食作用増強）などが報告されています。

上記でも述べました、薬効の『補気昇陽』には、昇提（しょうてい）、補気健脾（ほきけんぴ）などの作用を含んでいます。また、『托毒生肌』とは、身体の抵抗力の回復力、免疫能を高め、血行促進、肉芽形成の促進に働き、膿の生成・排出を強めるという意味があります。

## オウギってすごい！

オウギは右記の『オウギを含む方剤』からもわかる通り、多種多様な方剤に含まれています。これは上述した、オウギの多岐にわたる効能によるものと考えられます。

その中でも突出した効果（といえると思います）が、腎臓への働きです。慢性腎不全で透析導入間近の患者さんが、大量のオウギを服用することによって、透析に至るまでの期間を伸ばしたという症例が報告されています。また、腎不全や慢性腎炎などで腎機能の検査値（クレアチニン値）が高い患者さんにおいても、同様に大量にオウギを服用することでクレアチニン値が下がったという症例も発表されています。

オウギには、補気の効果もありますので、**十全大補湯**や**補中益気湯**のように人参、白朮と共に身体をサポートしてくれる方剤にも使用されています。実は、西洋ハーブの世界でもオウギは使用されており、特に免疫機能をサポートする目的で服用されることが多いです。

このように、色々な目的で使われるオウギってやっぱりすごいですね。

## オウギ を含む方剤

かみきひとう  
**加味帰脾湯**（精神不安・神経症）

じゅうぜんたいほうとう  
**十全大補湯**（体力低下・疲労倦怠）

せいしんれんしん  
**清心連子飲**（残尿感・頻尿）

とうきとう  
**当帰湯**（腹部膨満感）

はんげびやくじゅつてん まとう  
**半夏白朮天麻湯**（下肢の冷え・めまい）

ぼういおうぎとう  
**防己黄耆湯**（腎炎など）

ほちゅうえっきとう  
**補中益気湯**（病後の体力増強）

カッコ内の症状は代表的なもののみ抽出しています。



## オウギの種類

先日当診療所の倉庫に保管してある黄耆（オウギ）関連の標本をまとめてみました。右の写真にあるように、たくさんの標本が保管されていることが分かりました。左から、**紅耆**（こうぎ）、**黒耆**（こくぎ）、**綿黄耆**（めんおうぎ）、**壮耆**（そうぎ）とラベルされています。これに加えて**晋耆**（しんぎ）は処方生薬（刻まれた状態）として百味筆筒（ひやくみだんす）で保管されています。



**黒耆**は、中国で主に使用されるらしいのですが、オウギの外皮を黒く染めたものです。オウギというのは中国では非常に重要な生薬のうちの一つで、出産などのお祝いの時にオウギの束を贈るほど、人々から愛されているようです。

また、**綿黄耆**とは、質のいいオウギで、皮部の繊維性が強く、割っていくと“綿”のように繊維化していくことからこう名付けられているようです。

**晋耆**（*Hedysarum polybotrys*）もオウギに代わって処方されることがありますが、実はこれはオウギとは全く違う種の生薬であることがわかっています。これは、外皮が灰赤褐色をしており、そのため**紅耆**とも呼ばれています。これらはオウギと違い主の根から側根が生えるため、サンプルでもその側根を切り落としたような跡が見られません。

## オウギと晋耆について

2000年ごろに発表された論文でそれぞれの薬理作用（どの成分がどのように生体内で作用しているかの詳しいメカニズム）についてまとめているものがありました。共通する成分もあれば全く違う成分も含まれており、それに伴い薬理作用も多少違うようですが、例えば、共通の配合成分である配糖体（GABA：ギャバ）は免疫機能のマクロファージに作用することで、免疫機能をサポートするような作用があるようです。また、漢方薬ではあまり発生しないと思われる副作用については、20g/日を超える量でオウギを使用した際には皮膚のかゆみなどの副作用が発生していたのに対し、晋耆では副作用の報告があまりないとのことでした。そのため、オウギで副作用を起こしてしまった場合などは、晋耆への変更などを検討する医師もいるようです。ほかの文献では、オウギは“温”（あたためる）、晋耆は“冷”（さます）の違いがあると報告しているものもあります。この違いが、体質による効果や副作用の出やすさに関係するのかもしれませんが。

経験的な観点や医師の裁量で、どの生薬をどのくらい使用するかなどが決定されることの多い漢方ですが、同時に基礎研究によりその薬理作用も徐々に明らかになり、現在ではエビデンスに基づいた治療も進められています。

参考文献：1) 宋 清華， 糸数 七重， 丁 宗鐵. 黄耆と晋耆の臨床応用からの薬理と薬価額をめぐる諸問題， 和漢医薬学雑誌 17, 101-107, 2000（右 QR コードでそれぞれの文献 URL にジャンプできます）

2) 大井逸輝， 御影雅幸. 黄耆と晋耆に関する史的考察， 薬史学雑誌 48（1）， 23-29（2013）

